

令和 2 年度の実証的共同研究の 取組について

令和 3 年 5 月
政策評価課

令和2年度の実証的共同研究について

行政評価局では、EBPMのリーディングケースの提示を目指し、関係府省及び学識経験者とともに、「政策効果の把握・分析手法の実証的共同研究」を平成30年度から実施しており、令和2年度は以下の2件を実施（これまでに延べ10府省・9つの事例）

	①視覚障害のある児童・生徒に対するデジタル教科書等の教育効果【文部科学省】	②#7119（救急安心センター事業）の導入効果【総務省消防庁】
研究の概要	<p>現在、視覚障害のある児童・生徒に対して「紙の拡大教科書」が無償給与されているが、これと比較して、「デジタル教科書等」を用いた場合に、授業や家庭学習を支障なく実施できるか等を検証</p> <p>→デジタル教科書等は、紙の拡大教科書と同等以上に有効であることを確認</p>	<p>急なケガや病気で救急車を呼ぶべきか判断に迷うときに、専門家に電話で相談できるサービスである「#7119」について、全国展開に向け、その導入効果を検証</p> <p>→導入済地域と未導入地域を比較すると、救急出動件数や搬送人数等が減少しており、導入効果があることを確認</p>
事案の特徴・研究のポイント	<p>○政策対象者の状況（障害の程度やPC等の利用状況など）が区々であり、既存のデータも少なかった。</p> <p>→定量的なデータの不足をカバーするため、アンケートやヒアリングを（ほぼ全てオンラインで）実施し、得られた定性的な情報も活用し検証</p> <p>○政策の実態把握があまり行われておらず、ロジックモデルや調査仮説の作成・設定が困難</p> <p>→調査着手後も総務省、関係府省及び有識者が共同して、ロジックモデル等を見直し続けたことで、より適切な効果検証につなげるとともに、今後効果検証を行う際の課題も明らかになった。</p>	<p>○悉皆性の高い既存のデータが豊富にあったものの、専門的な分析には活用されていなかった。</p> <p>→データを保有する部署と連携し、効果検証に活用できるデータを整理・特定した上で、専門家による統計的手法を用いた分析を実施</p> <p>○政策担当部局が、事前に実態把握・データ収集をある程度行っていた。</p> <p>→事前に得られた情報・データを活用し、政策担当部局を含む関係者による検討が効率的に進められたことで、調査仮説の設定や詳細な調査事項の決定が速やかに行われ、質の高いデータを得ることにつながった。</p>

（今後の取組）『政策評価審議会提言』（令和3年3月）を踏まえ、引き続き、ロジックモデルの活用やデータ解析等によるエビデンスの獲得・活用等について研究を深める。

(参考) 令和2年度の実証的共同研究①

視覚障害のある児童・生徒に対するデジタル教科書等の教育効果【文部科学省】

研究の背景	<ul style="list-style-type: none">・ 文部科学省では、視覚障害のある児童・生徒に対する学習環境の保障のため、紙の拡大教科書が無償給与しているが、デジタル教科書等を使用することも可能・ 紙の拡大教科書は、文字の拡大範囲が限定的で、大判・分冊による不便さがあるなど、必ずしも全ての視覚障害のある児童・生徒にとって最適な方法となっていない可能性
研究の目的	視覚障害のある児童・生徒へのより適切な教科書の提供方法について示唆を得ること
主な研究の論点	<ul style="list-style-type: none">・ 障害の程度等によるデジタル教科書等の利用のしやすさの違い・ 教科書の内容へのアクセスの観点でのデジタル教科書等と紙の拡大教科書の有効性の違い・ デジタル教科書等の普及・利用促進を図る上での留意すべき事項や今後の課題等
調査・分析内容	デジタル教科書等を用いて授業や家庭学習を行った場合に、従来の紙の拡大教科書を用いた場合と比較して、授業や家庭学習が支障なく実施できるかなどの点を、アンケート調査、ヒアリング調査及び実験により分析
研究の結果と示唆	<ul style="list-style-type: none">・ 障害の程度・内容、周囲の環境（特にICT環境）、学習場面等によって、デジタル教科書等の利用のしやすさに違いがあると考えられること・ ①デジタル教科書等と紙の拡大教科書の作業効率（書き込み、削除、音読及び検索）は、同等程度であること、②デジタル教科書等は、自由度の高い拡大機能や読み上げ機能等、多数のメリットが挙げられる一方、デメリットについては限定的であることから、視覚障害のある児童・生徒が教科書の内容に適切にアクセスするという観点において、デジタル教科書等は紙の拡大教科書と同等以上に有効と考えられること・ デジタル教科書等を利用しにくいと考えられる児童・生徒や利用環境への対応等、デジタル教科書等の普及・利用促進を図る上での留意事項、今後検討・対応すべき課題

(参考) 令和2年度の実証的共同研究②

#7119 (救急安心センター事業) の導入効果【総務省消防庁】

研究の背景	消防庁では、近年の救急出動件数の増加等を踏まえ、住民が急なケガや病気をした際に、救急車を呼ぶべきかどうか等の判断に迷う局面で、専門家から助言を受けることができる電話相談窓口「#7119 (救急安心センター事業)」の全国展開を推進 (現在、人口カバー率46%)
研究の目的	#7119の導入が、救急車の適正な利用や救急医療機関の受診の適正化に向けて効果を発揮しているか把握し、同事業の今後の展開に向けた判断材料とすること
主な研究の論点	<ul style="list-style-type: none">・ #7119が救急出動件数や軽症者割合等を減少させているか・ #7119の導入だけで効果が出るのか、認知が高まって効果が出るのか (行動変容への影響)・ #7119の認知の経路、近くに病院やかかりつけ医等がいることと認知の影響
調査・分析内容	#7119の導入済地域での認知度や、導入済地域と未導入地域における住民の意思決定プロセスの違いを分析するためのアンケート調査、#7119の導入効果や、24時間制・時間限定制での導入効果の違いを明らかにするための定量分析 (注) 及び消防本部へのヒアリング調査
研究の結果と示唆	<ul style="list-style-type: none">・ 導入済地域では、未導入地域と比較すると、救急出動件数、搬送人数、軽症者割合及び夜間割合が減少しており、導入には一定の効果があること・ 導入効果には認知度が大きな影響を与えており、導入から日の浅い地域等では認知度が低いケースもあることから、認知度の向上を図ることが重要であること・ かかりつけ医等がいることが認知に大きな影響を与えており、かかりつけ医等と連携しながら#7119の認知度を高めることが有効な方策と考えられること

(注) 事業の実施状況や利用可能なデータの性質を踏まえ、定量分析に当たっては、下記2つの分析手法を用いた。

差の差分析：施策対象者及び非対象者のそれぞれについて、施策実施前後のデータを用いることで、トレンド要因を取り除いたうえで効果測定できる方法。今回は#7119の実施・未実施の隣接地域などを用いて分析を実施。

合成コントロール法：施策非対象者のデータを合成することによって、施策対象者が施策を受けなかった場合の仮想的な状況を推計し、施策の効果を測定する方法。今回は#7119の実施地域と類似した地域を選定して分析を実施。また、把握したい地域ごとの#7119の効果も分析。

(令和2年度「#7119 (救急安心センター事業) の導入効果に関する調査・分析」報告書概要版より)